

おとぎ話におけるフェミニズム

Les Contes à rebours par Typhaine D

松本潮美

はじめに

近年、フランスでは、*L'écriture inclusive* についての議論がしばしば行われている。*L'écriture inclusive* とは、男女の表現の平等を保証するために書記法や統辞法を変化させることである。例えば、今までフランス語で「教授」は男女ともに「*le professeur*」であったが、それを女性形は「*la professeure*」にするといった新ルールのことを指す。賛否両論あるものの、多くのメディアや作家がこの変化に追随している。

加えて、昨年度、多くの女性たちが自らの性暴力被害を語る『#Me too 運動』がツイッターやフェイスブックなどのソーシャルメディア上で盛んに繰り返され、多くの共感を呼んだ。このように、女性の権利拡大を目指したフェミニズム運動は、フランスのみならず、世界中の至るところで盛んになっており、社会学のみならず言語学や文学の分野においても注目すべき論点だといえることができる。

それでは、人間のアイデンティティ形成の一助を担っている「児童文学」の世界において、昨今のフェミニスト運動や*L'écriture inclusive* は如何にして描かれているのだろうか。本稿では、フランス人女性作家であり、フェミニストでもある Typhaine D. の *Les Contes à rebours* をコーパスに、児童文学におけるフェミニズム運動を、文学的かつ言語学的見地から紐解いていきたい。

2. *Les Contes à Rebours*

Les Contes à rebours は Typhaine D. によって書かれ、2016年にフランスの Les Solanées 出版社から出版された短編集である。この短編集は10章で構成されており、有名なペローやグリム、アンデルセンの童話を基に書かれているが、その内容は彼らの作品に見られる男性的な従来の童話を超えたフェミニズム要素の強いものとなっている。この物語は、紙や電子媒体で出版される前、2012年のフェスティバル、*Elles résistent à Paris* にて劇として初演され、現在に至るまでフランスやベルギー、ケベックなどのフランス語圏で上演されている。

2.1. 作者：Typhaine D.

この童話の作者 Typhaine D. は、フランス出身のフェミニストである。フランス語の「作家」*l'auteur* は男女同形で、女性形は存在しないが、フェミニストである彼女は自らを紹介する際、*l'autrice* を女性作家を示す職業名詞としてわざわざ用いている。Typhaine D. は独立した女性で、作家のみならず、演出家、コメディアン、演劇の指導者として、さまざまな芸術分野で才能を発揮している。1986年にパリで生まれ、幼少期から、芸術、特に演劇に携わる仕事がしたいと願っていたが、彼女は同時に男女間の不平等と文芸分野における男性優位な傾向を痛く感じていた。この状況を打開するために、彼女は現在フェミニズム運動に積極的に身を投じており、本作の序文でも、作家は男性による性暴力から女性や子どもを守る戦いのみならず、人種差別や環境問題、肉食主義など、多様な社会的な戦いに参加していると言及している。

2.2. 出版社：Les Solanées

Les Solanées は比較的新しいフランスの出版社である。本書のあとがきによると、この Les Solanées という名前は、魔女が使っていた薬草の名前から取られている。その薬草は、他の種類のものと同様に、人々を癒すことができるが、用量用法によっては人を殺めることもできるものだという。編集者は、編集社の

名前を女性歴史学者 Athénaïs Mialaret に捧げている。彼女は夫 Jules Michelet とともに「魔法使い」の研究をしていたが、その功績は多くの女性と同じように男性の存在の裏に隠れてしまった。彼女や、彼女のように優れていたのにも関わらず、「ガラスの天井」によって日陰に隠れてしまった優秀な女性達に敬意を表して、この名前が付けられたのである。

2.3. フェミニスト童話 : *Les Contes à rebours*

Les Contes à rebours は伝統的な童話のパロディーだということができる。この短編集はプロローグと9編の短編の、計10パートから成り立っている。各5ページほどの、とても短い物語である。そのあとに、あとがきや出版社の説明、支援団体への連絡先などが書かれているが、話の本筋とは関係があまりないので、今回は触れないでおく。

これらの10つの物語はそれぞれ、人々に親しまれている大衆童話と関連している。そして、登場人物たちもこれら童話に登場する人物で、各章のタイトルにもそのことが明示されている。以下に簡単な粗筋を紹介する。なお、*Les Sept Filles de l'ogre* 以外の話全てが、一人称で語られており、この文体のおかげで、読者である少女や女性たちは物語のヒロインに感情移入しやすくなっていると言える。

2.3.1. « Prologue »

プロローグにて、作者は本書のコンセプトを説明している。

まずは、*La Féminine Universelle* である。*La Féminine Universelle* とは、(作者曰く) 男性中心的なフランス語に女性要素を取り入れ、言語上での女性の権利向上及び男女の平等を図る試みである。詳細は後述するが、例えば、本来ならば男性形で書くべきところを、あえて女性形にすることが例として挙げられる。プロローグでは、冒頭の « Il était une fois. » を « Elle était une fois. » と書くことで、その具体的な説明をとしている。

そして、内容のコンセプトについても説明している。それはどの短編も主人公は「女性」であるというところだ。長らく、ペローやグリム、アンデルセンなどの男性達の書いた童話を女性たちは受け入れてきた。しかし、この物語の語り手は女性であり、プリンセス、魔女、登場する全ての女性が「彼女たち自身について語る」のである。

2.3.2. « *Shéhérazade* »

千夜一夜物語をベースとした物語。主人公の *Shéhérazade* は現代のイスラム教女性として登場する。街中で遭遇する男性達によるハラスメントについて語り、「女性であるということは常に男性から攻撃されるリスクを抱えることである」と嘆く。

2.3.3. « *Blanche neige* »

この話で扱われている題材は、「女性同士の同性愛」と「性的奴隷」である。実父によって過剰なほどに守られ、世間から孤立していた白雪姫。そんな彼女の家に、とある女性が父の再婚相手 (= 義理の母) としてやってくる。彼女と義理の母は恋に落ちてしまい、それに激怒した父は白雪姫を7人の小人に売ってしまう。その後、彼らは白雪姫を王子に売り渡してしまう。しかし、王子も7人の小人と同様に白雪姫のことを奴隷のように扱ったため、彼女は王子の城から逃げ出す。その後、彼女は義理の母と再会し幸せに暮らすこととなる。

2.3.4. « Carabosse »

一般的に、伝統的な童話に登場するのは、美しく、若く、細く、そして親切で、美德を兼ね備え、優しい、素直で従順な女性である。しかし、意地悪な女性も、敵としてではあるがもちろん存在する。それが Carabosse である。『眠りの森の姫』などに登場する悪い妖精がその例である。作者はこの年老いた、意地悪な女性の固定観念を崩し、主人公にすることに試みた。それが、このお話である。ここで Carabosse はフェミニズムの戦士である魔女として生まれ変わり、女性たちを守るためのコミュニティーを建設する。

2.3.5. « Les sept filles de l'ogre »

この章で作者は、ペローによる『親指小僧』の矛盾点を斬り込んでいる。原作は、親指小僧とその兄弟が鬼の家の7人の娘たちを生贄にすることで生き残る「ハッピーエンド」として書かれているが、Typhaine D.は姉妹が兄弟の代わりに食べられてしまったことを、子供に対する虐待と重ね合わせて嘆いている。

2.3.6. « Cendrillon »

この物語は、2012年に夫殺しで有罪判決を受けた Jacqueline Sauvage に捧げられている。彼女の夫は長い間 Jacqueline とその娘に暴力を振るい続けており、裁判では家庭内暴力での正当防衛の適用が争われた。

物語の主人公は、現代を生きるシンデレラだ。彼女は幼いころ、素敵な王子様を夢見ていたが、現実とは違った。優しかった彼女の夫は結婚を機に変貌し、精神的かつ物理的な家庭内暴力を始めた。

(1) « J'ai vu une fois une campagne contre les violences des conjoints qui disait aux Femmes : « Dès la première gifle, il faut partir. » Sans blague. Mais quand ils commencent à Nous¹ frapper, c'est bien parce qu'on ne peut plus partir. » (N°285)²

(私は一度、配偶者の暴力について女性に呼びかけるキャンペーンを見た：「一発殴られたらすぐにでも家を出るべきだ」と。冗談抜きで。でも、彼らが殴り始めたら、もう逃げることはできない。) (松本訳)

家庭内暴力の被害者が置かれる状況をシンデレラはこのように説明している。最終的に、彼女は子供と逃げ出すことに成功した。しかし「もし今度見つかってしまったら、彼は私たちを殺すだろう」と不安を拭いきることができない。

2.3.7. « La petite Sirène »

人魚姫のストーリーを通じて、作者は性的被害を受けた人物が抱えるトラウマとそれを乗り越える難しさを描いている。幼い人魚姫は、浜辺で幸せな日常を送っていた。だがある夜、男がやってきて、彼女は彼によって強姦されてしまう。大好きだった人魚のヒレは、無残にも引き裂かれてしまった。この衝撃的な出来事のせいで、彼女はもう人魚ではなくなり、海にも行けなくなってしまった。

¹ nous を女性化したもの。詳細は4.2節を参照。

² 参考文献にあげたTyphaine D. (2016)は電子書籍を利用したため、引用時は電子書籍の位置番号を示す。

2.3.8. «Anne la sœur Anne»

7番目の物語は、怖い童話として有名なペローの『青髭』が元ネタとなっている。主人公は青髭に嫁いだ女性の姉妹 Anne であり、青髭に追い詰められた女性の代わりに、目を凝らして助けがやってくるのを待ちわびる。ペローの物語の中で助けにやってくるのは彼女らの兄弟であるが、フェミニストである Typhaine D. のヒロインを助けにくるのは「他の女性たち」である。青髭の物語は、家庭内暴力を解決することの難しさを体現しているが、Typhaine D. は女性たちの団結によって、暴漢を撃退し、辛い境遇から被害者を救済できることができるとしている。

2.3.9. «La Grande Chaperonne Rouge»

この童話に出てくる赤ずきんちゃんは、もう小さくはない。大きくなった赤ずきんちゃんは私たちに疑問を投げかける。

(2) «Aujourd'hui, la forêt, et même les rues de nos villages sont réservées aux « grands-méchants-loups ». Et tout le monde semble trouver ça normal. C'est fou !! » (N°384)

「今日、森や街を支配しているのは『大きくて意地悪な狼』だ。でも、みんなはそれを普通のことだと思っている。そんなの狂っている。」(松本訳)

(3) «Si un « loup » Nous dévore, on dit que c'est de notre faute (...)» (N°400)

「もし、狼が私たちを食べたら、人々は私たちのせいだという。」(松本訳)

そして、彼女は声高々に宣言するのだ。

(4) «Tremblez ! Le Monde de demain ne sera plus fait pour vous !» (N°400)

「震えてろ。明日の世界がお前たちのためにあると思うな！」(松本訳)

このように、この話は、女性に対する暴力を正当化する男性優生主義的システムに対する反撃を示唆しているのである。

2.3.10. «La Belle au Bois Éveillée»

最後は『眠りの森の美女』を題材とした短編である。しかし、この美女、眠ってはいないのだ。実は、女性だけの世界を作るために、彼女自身が魔法を学び、森を眠ったようにみせる魔法をかけていたのだ。この女性だけのユートピアでは、年功序列、出自や階級による差別が廃止され、支配体制もなくなり、暴力もなくなった。女性たちは支え合い、助け合い、愛し合い、トラウマを癒し合いながら暮らしている。男性たちに対して女性たちが自らの足で立つことを宣言するとともに、他の女性にも暴力に対して戦うことを推奨している。

以上がそれぞれの章の簡単な粗筋である。それぞれの物語の冒頭に、作者は *L'Hymne des femmes* の歌詞を引用している。この歌は *Le Chant des marais* (軍歌) のメロディーに乗せて、71年の女性解放運動の時から多くのフェミニストによって歌われている。

3. フェミニストとおとぎ話

*Le Petit Robert*によると、タイトルにある «à rebours» とは「逆にする」こと。同意語には«à l'envers» が挙げられている。*Les Contes à rebours* のタイトル通り、Typhaine D.は古典的な童話をひっくり返すことで、従来のおとぎ話を現代的に作り直している。そのため、Typhaine D.の書いた童話は、従来の童話のステレオタイプに対応していない。例えば、童話で必ずと言っていいほど用いられる «Il était une fois,» (「昔々あるところに、」) では始まらないし、«Ils vécurent heureux et eurent beaucoup d'enfants.» (「彼らは幸せに暮らし、たくさんの子供にも恵まれました。」) で終わることもない。

作者によると、子供は親から口伝される物語を皮切りに、愛情や性別への向き合い方、自らのアイデンティティを構築していくが、その物語の内容は、性差別やステレオタイプに溢れているという。子供のための物語は、男女の社会的表現に影響を及ぼすテレビと同じように社会的な窓口として機能している。以下は Cromer et Turin (1998, p.228)からの引用である。

(5) « Les images des albums inculquent aux petits enfants une idée de la famille et de la société structurée par des rôles sexués stéréotypés, qui confient les femmes dans la sphère familiale et représentent les hommes comme uniques acteurs de la création, des décisions, de la sphère du pouvoir. »

「絵本の絵は子供達に、女性は家族に尽くし、男性は創造と決定、そして権力を持つ唯一の役者とする、ステレオタイプ化された性別役割によって組み立てられた社会の、そして家族の思想を教え込む。」(松本 訳)

古典的な童話に登場するプリンセスは、いつも美しく聡明であることが求められ、ハッピーエンドの一要素としてたくさんの子宝に恵まれる必要がある。彼女らの人生は、自分自身で掴みとるものではなく、男性からのキスに委ねられるのである。このように、おとぎ話のヒロインは若い読者に、「美しく」「繊細で」「優しく」「親切的な」女性像を植え付けるが、Typhaine D.は伝統的な童話に登場するこれらの固定観念に疑念を抱いている。インタビューにおいて作者は、次のように語っている。

(6) « Quand j'étais petite, des éléments des contes me mettaient en colère, me posaient question, me paraissaient suspects... Par exemple, on trouvait normal que je me soucie du sort du petit Poucet et de ses sept frères, mais farfelu que je m'émeuve pour les sept Filles de l'ogre lorsque leur père les dévore. Non, décidément, je ne trouvais pas que dans cette histoire : tout était bien qui finissait bien. »³

(私が幼かった頃、童話の要素は私を怒らせ、疑問を呈し、怪しいもののように思っていた。例えば、親指小僧において、主人公とその兄弟を心配することは普通に見られたけど、鬼の七人の娘達が貪り食われた時に私が動揺したことは奇妙に捉えられた。いや、やはり、私にとってこの物語は「めでたしめでたし」で終わらなかったのだ。) (松本 訳)

Typhaine D.は、女性のための物語をつくるため、フェミニストの視点で童話を書き直した。主人公は童話

³ Julien Helmlinger « Contes à rebours : histoires des princesses modernes par Typhaine D », *ActualLitté*, 12.10.2016

<https://www.actualitte.com/article/monde-edition/contes-a-rebours-histoires-de-princesses-modernes-par-typhaine-d/67443>

に登場する女性や少女達。作者は彼女らをより自立していて、よりアクティブな人物に書き換えた。そして、ストーリーで扱うのは女性を取り巻く暴力である。目に見える暴力だけでなく、精神的なものや、日常に潜む危険、同性愛嫌悪を題材にしたものもある。このように、この短編集で作者は、性暴力、強姦、近親相姦など、女性の日常を脅かす危険をテーマとして扱っている。残念なことに、性犯罪の被害に遭うのは多くの場合は女性である。そして、毒リンゴを食べて倒れる白雪姫など、おとぎ話の中でも被害者は基本的に女性である。Garcin-Marrou et Harre (2005, p.21)は次のように考察している。

(7) « La victime est féminine. Cela renvoie sans doute à l'idée selon laquelle la femme serait plus fragile et plus faible que l'homme. L'héroïne des contes de fées est exposée à la victime de l'histoire du conte et ce n'est pas par elle-même qu'elle réussira à dépasser cette situation mais grâce à une intervention extérieure et masculine. Cette tendance à représenter la femme comme une victime et un être passif se rencontre à travers sa passivité louée devant le déroulement de sa vie et le fait qu'elle est souvent l'objet de la quête pour le personnage masculin. Il semble donc bien que la représentation de la femme comme un être passif soit encore inscrite dans notre société, celle-ci étant une base de la domination masculine ».

4

〔「被害者」は女性名詞だ。その事実は女性が男性より壊れやすく弱いという印象を与える。童話のヒロインは物語の被害者として登場し、この状況を打開できるのは外から干渉してきた男性のおかげであり、決して彼女自身の功績ではない。女性が被害者として、そして受け身な存在として表象するこの傾向は、彼女の人生の展開と男性主人公の冒険のための目標として使われる事実を前に、褒められた受け身と介して見出される。受け身の存在としての女性の表象は社会に登録されているようだ。なぜなら社会は男性の支配の基礎になっているからだ。〕(松本訳)

このように *Les Contes à rebours* の中で性的かつ暴力的なテーマが主軸として扱われているが、これは長い間、児童文学の世界ではタブー視されていた。*Les Contes à rebours* はおとぎ話の短編集であり、おとぎ話といえば子供のための物語というイメージがある。しかし、これらの物語は、一概に若い読者をターゲットにしたものではない。Typhaine D.によると、当初 *Les Contes à rebours* は大人のための劇として書かれたのだという。しかし、のちに子供のために書き直されることとなる。

本作において、ヒロインはこれらの危険な現実、時に諦めたり、時には勇敢に戦いを挑んだりしながら立ち向かう。この短編にも、その流れを伺うことできる。まず初めに、女性を取り巻く危険な環境を読者に提示し、最後には暴力に対して立ち上がり戦うことを呼びかけている。

加えて、*Les Contes à rebours* は男性中心であった従来の昔話の登場人物をひっくり返している。優しく魅力的な男性は全く存在しない。男性は否定的に描かれている。女性を守ることができるのは女性であり、男性からの庇護はもう必要ないのである。伝統的なおとぎ話では、男性だけでなく女性も主人公の敵となる。シンデレラは継母の被害者であり、眠りの森の美女は悪い妖精によって長い眠りにつく。しかし、Typhaine D.の物語で、女性を脅かすのは男性だけであり、女性も動物も彼女らの敵ではない。作者の世界観では、すべての女性が善人であり、男たちに虐められていた動物は良い友人となる。

⁴ « Il était une fois des femmes, des hommes, des contes », Isabelle Garcin-Marrou et Isabelle Harre, 2005, p.21
http://doc.sciencespo-lyon.fr/Ressources/Documents/Etudiants/Memoires/Cyberdocs/MFE2005/arlaud_1/pdf/arlaud_1.pdf

4. おとぎ話の女性化

本文では、フェミニストの言語的特徴を観察することができる。それを、Typhaine D.は「La Féminine Universelle」と名付けている。「La Féminine Universelle」とは、(作者曰く)男性中心的なフランス語に女性要素を取り入れ、言語上での女性の権利向上及び男女の平等を図る試みである。

4.1. 非人称の「il」

(8) Elle était une fois...

*

C'est belle, n'est-ce pas ?

Et puis, c'est logique aussi : UNE fois, qu'elle était.

(...)

Mais là... La Féminine Universelle s'impose (sic).

(「昔々、あるところに……。美しい(表現)ですよ。そして、論理的(な表現)でもあります : Une foisが女性名詞ですから。(中略)しかしここでは、La Féminine Universelleが不可避なのです。」)

おとぎ話でよく用いられる「Il était une fois.」の「il」は非人称である。三人称単数男性形ではない。どちらかといえば中性的な意味を帯びている。しかし作者はこの「il」をあえて「elle」に置き換えることで、これが女性の物語であることを強調していると推察される。非人称「il」を「elle」に意図的に書き換えた構文は、これ以外にも、「Elle n'y avait pas d'histoire.」(N°196)などがあった。

4.2. 人間を表す単語に「e」を付け足す

男女両方の人間を指し示す語にあえて「e」を付け加えることで女性化を促している例も確認できる。例えば、「moi = moie」や「vous = voues」、そして「nous = noues」である。「moie」は全編を通して全28回登場する。

(9) Moie aussi, j'étais condamnée à l'oubli par le tribunal de l'injustice mâle.

(私もまた、男性による不公平な法廷によって、忘却の刑に処された。) (松本訳)

なお、一度だけ「moi」が登場したが、コンテキストから誤植だと推測される。

「Noues」は94回登場する。なお本文中に「nous」は一度も登場しなかった。

(10) « Ce sera lui ou Noues. »

(殺すのは) 彼かもしれないし、私たちかもしれない。) (松本訳)

「Voues」は30回出現する。読者に対する呼びかけである。普通の「vous」も10箇所が登場するが、その全てが男性を指し示している。

(11) « Je ne peux pas Voues dire. » (N°151)

(私は貴女がたに言うことができないんです。)

«Voues» が «Noues» より顕著に少ないのは、この物語のほとんどが一人称で語られているからであろう。「Noues」も「Voues」も、その全てが、文頭であろうが文中であろうが文末であろうが、「Noues」、「Voues」と大文字で表記されている。このように女性を指し示す語の頭に大文字を用いることで、女性の存在とその団結を強調し、フェミニズム的側面を前面に押し出している。「Noues」の他にも普通名詞 «Sœurs» の«S» が大文字で表記されている。

4.3. 普通名詞の女性化

作者は、単語に少し手を加えることで、普通名詞の女性化にも試みている。以下はその例だ。

4.1. «L'amour» または«L'Âme»

(12)« (...) je vis paraître à la fenêtre, mon Âme, ma Reine. » (N°175)

(私は窓に、私の愛する人、私の女王が現れるのを見た。)

«L'amour»+«e»。「愛」。「L'Âme»の場合は「愛しい女性」の意味で使われる。二つ合わせて計7回登場する。「L'amour」も3箇所発見できたが、こちらは「普遍的な愛」のことを指している。

4.2. «Le patrimoine»

(13)« Notre Patrimoine...qui s'y écrit ! » (N°212)

(そこに書かれているのは……私たちの遺産だ！) (松本訳)

«La mère»+«le patrimoine»。「女性の作り出した遺産」を意味する。上記の一回のみ登場。

4.3. «La soeurcière»

(14)« (...) les brasiers du génocide des Soeurcières, (...) » (N°212)

(前略) 魔女狩りの業火 (後略) (松本訳)

«La sœur»+«le sorcière»。「魔女」の意。3箇所に登場する。女性のために戦うフェミニストたちを指す用語として使われている。

4.4. «Le femmage»

(15)« (...) Noues rendons Femmage. » (N°215)

(前略) 私たちは敬意を表す。)

«La femme»+«l'hommage»。「女性に対する敬意」。登場するのは上記の一箇所のみ。

5. その他

ここでは、童話におけるフェミニズムとは関係ないが、世代を超えて慣れ親しんできた童話を現代的な童話に変化させた本作で、特筆しておくべき点を何点か挙げておこうと思う。

今まで、Typhaine D.の書く話は、伝統的なおとぎ話のステレオタイプをひっくり返す、現代的な物語であるということを述べてきたが、全面的に従来のおとぎ話を無視しているわけではない。例えば、『眠りの森の美女』に登場する「*en bottes de sept lieus*」などの用語を使うことで、伝統的な童話のステレオタイプを保持している。しかし、シェヘラザードが地下鉄に乗ったり、白雪姫がスターウォーズのレイア姫を引き合いに出したり、眠り姫が近代兵器を取り出したりと、どちらかという現代風に脚色されている部分のほろが目立っている。

文体的なことにも言及しておく、最初に述べたように、この物語は初め演劇の脚本として作られたため、劇のような表現を散見することができる。*La petite Sirène* (下図、N°319, No°331) で説明しようと思う。まず、長い描写が続き、「*Ils m'observait*」から突然空気が変わる。短いフレーズと繰り返しが使われ、前半と後半で緩急が鮮やかに付けられている。

laquelle Nous n'en finissions plus de Nous taquiner, de
Nous contempler, de Nous désirer.

Mes jambes serrées l'une contre l'autre, légèrement repliées,
corps en avant, sur mes bras dressée, crinière au vent, je lan-
çais mon regard et mes rêves plus loin que la courbure de la
Terre.

Et mes larmes d'émotion grandissaient encore la Mer, les
bonnes larmes, Vous savez, celles que l'on verse quand le
cœur déborde de beauté, pour transcender encore le pay-
sage d'un flou délicat qui emplit et sature doucement le bas
des yeux.

D'ailleurs, mes larmes étaient salées comme ma Mer, ques-
tion d'héritité sûrement.

Je plongeais en eau comme on s'élançait dans les bras ouverts
d'une Amour passionnée.

Toujours elle me rattrapait, douillette, amusée.

Dauphine de l'océan, les gens du village s'arrêtaient pour
me regarder, paraissant et disparaissant en arc de cercle, les
bras en avant dans les flots amis, comme une curiosité, pas
vraiment faite comme eux, pas les pieds sur terre, pas de
pied sûrement, disaient les gens, puisqu'elle nage les jambes
jointes, comme une sirène !

Ils m'observaient...

De la plage, là-bas.

De la plage où je ne vais plus.

La petite Sirène, ils m'appelaient alors.

Les gens, je n'y faisais pas attention.

Je n'aimais que la Mer foisonnante, l'Horizon changeante et
Moie.

Qu'est-ce que je m'aimais, Moie.

Peu m'importaient les êtres humains.

Car la petite Sirène j'étais alors.

Enfant.

Pas comme eux.

Sur la plage, là-bas, sur la plage où je ne vais plus.

Un soir, un homme est venu.

Il s'est imposé entre ma Mer et Moie.

Il a masqué mon Horizon.

Il m'a dit que je n'étais pas vraiment une sirène.

Qu'il allait me le prouver.

Cette queue de sirène, d'un seul tenant, que j'aimais, il l'a
écartelée.

J'ai résistée.

Même sans pouvoir bouger ni crier, j'ai résistée.

De toute la force des océans j'ai résistée.

La Mer a grondé plus forte que moie.

L'Horizon a même déroulé son plus sanglant appareil.

Mais rien n'y a fait.

La beauté est démunie devant la laideur qu'elle ne connaît
pas.

De ma queue sirène ne restent rien que deux jambes écar-
tées.

Bien loin désormais séparées l'une de l'autre.

Maintenant, oui, j'ai les pieds sur terre.

Faut bien.

Maintenant, je ne peux plus voir la Mer.

Car ce jour de ma transformation de Sirène à Femme rejaillit
alors comme une vague terrible et qui m'engloutit.

そして、極めつけは、「contes」と「comptes」の言葉遊びだ。「*Passer des contes défaits aux comptes de faits*」(N°58)、*« Les bons contes font les bonnes amies »*(N°218)、そして、「*Règlement...de contes*」(N°471)など、随所に言葉遊びが現れている。何より見事なのはタイトルの「*Les Contes à rebours*」。「Contes」を「Compte」にすると、「カウントダウン」の意味になる。男性中心的な世界終焉への、女性が何の危険もなく生きることが出来る世界の始まりへのカウントダウンを想起させる興味深い表題である。このような言葉遊びから、この短編集の芸術的な側面を伺うことができる。

6. 終わりに

本稿では、児童文学及び童話において、フェミニズムは如何に扱われるかをTyphaine D.の*Les Contes à rebours*をコーパスに考察してきた。フランス語は日本語とは違い、文章に女性・男性が現れやすい。そのため、昨今のフェミニズム運動の隆盛に伴い、社会的地位のみならず言語的地位においても、今までのフランス語のあり方に異を唱える人も多い。児童文学、特におとぎ話は幼少期に誰もが一度はその内容を耳にしたり、目にしたりしており、アイデンティティや人間関係の形成にも大いに影響を及ぼす。特にペローやグリム、アンデルセンのものはヨーロッパ圏のみならず、世界各国で親しまれている。Typhaine D.はそ

の内容を大胆にもひっくり返した。それも、内容にフェミニズムと、フランスの児童文学界ではタブー視されている内容を大いに盛り込んで。初めは若い読者のためではなく、演劇の脚本として書かれた作品ではあったが、児童文学に及ぼす影響は大きいだろう。

今回はフェミニズムを狙って書かれたものを対象に、文学的、言語学的見地から、児童文学におけるその動向について述べてきたが、特にそういった目的がなく書かれている一般的な児童文学が *L'écriture inclusive* などのフェミニズム運動をどのように扱っているのかも気になるところである。それを今後の課題とし、本稿を閉じたいと思う。

参考文献

Typhaine D. (2016) : *Les Contes à rebours*, Les Solennées

Charles Perrault (1981) : *Contes*, Édition critique de Jean-Pierre Collinet, Gallimard

朝倉季雄 (2002) : 『新フランス文法事典』 白水社

Sylvie Cromer et Adela Turin (1998) : « Que racontent les albums illustrés aux enfants ? Ou comment présente-t-on les rapports hommes-femmes aux plus jeunes ? », *Éducation et émancipation* Volume 11, numéro 1, pp.223-230

Isabelle Garcin-Marrou et Isabelle Harre (2005) : « Il était une fois des femmes, des hommes, des contes »

http://doc.sciencespo-lyon.fr/Ressources/Documents/Etudiants/Memoires/Cyberdocs/MFE2005/arlaud_1/pdf/arlaud_1.pdf

DEGBE Esther (2017) : « Et si les contes de fées favorisent les violences faites aux femmes ? », *Le HuffPost*, 02.12.17,

https://www.huffingtonpost.fr/2017/11/23/et-si-les-contes-de-fees-favorisaient-les-violences-faites-aux-femmes_a_23286836/

Julien Helmlinger (2016) : « Contes à rebours : histoires des princesses modernes par Typhaine D », *ActuaLitté*, 12.10.2016

<https://www.actualitte.com/article/monde-edition/contes-a-rebours-histoires-de-princesses-modernes-par-typhaine-d/67443>

<http://8mars.info/l-hymne-des-femmes?lang=fr>

Typhaine D. オフィシャルサイト (仏) : <http://www.typhaine-d.com>

(まつもと しおみ / 文芸言語専攻2年)